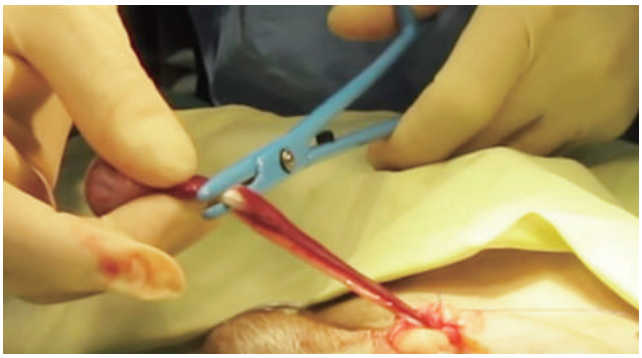
シーリングデバイスによる卵巣動静脈のシーリング



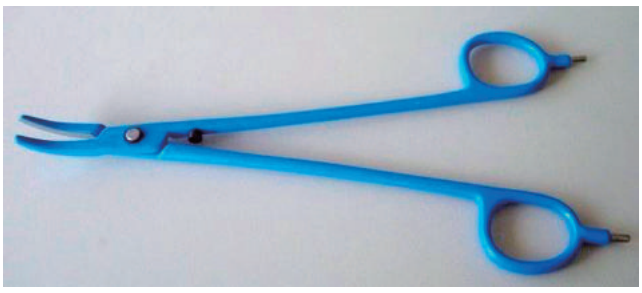
（図6-1）

（図6-2）

（図6-3）

治療の流れ：

動静脈の切断する箇所をシーリングデバイスで挟み、出力15で約5秒間通電する。(図6-1)　シールが不十分と感じれば通電部を少しずらし再度シールを行う。5mm以上の血管や脂肪が付着している血管は出力を適宜上げて通電する。十分にシールできたと確認（図6-2）したらシザーズで切断する。(図6-3)



症例解説：

避妊で卵巣の動静脈を結紮すると希に縫合糸肉芽腫（縫合糸反応性肉芽腫）という縫合糸が原因でおきるアレルギー疾患がある。近年、獣医系の学会や論文で多数症例報告があがってきている。どのような犬種でも起こりえる病気であるが、ミニチュアダックスフント、シーズー、チワワ、シェルティ、マルチーズ、トイプードル、雑種などで報告がある。最近の報告では圧倒的にミニチュアダックスでの発生が多いと言われている。手術を行うにあたって、血管を結紮したり、組織を縫合したりするには外科用の縫合糸が必要になる。しかし、どのような素材の縫合糸を利用したとしても生体にとっては「異物」という事になるので、縫合糸の使用部位で大小の差はあるが組織反応が起きることになる。当然この糸は滅菌状態で使用されるが、何年経っても生体内に残存するという特性をもっている。この非吸収性の性質が過度の組織反応を惹起していると考えられる。最近ではいわゆる「溶ける糸」、合成吸収性縫合糸が用いられることが多くなっているので、もし吸収性糸による強い組織反応が出たとしても、その糸が生体内に吸収されてしまうまでの期間なんとかしのげれば大事には至らないといえる。
しかし、理想としては体内にできるだけ異物である糸を残さない手術（無結紮手術）をするべきであろうと考えられる。そこで動静脈を凝固（シーリング）してしまえば、糸を使う必要がなくなる。血管シーリングの専用機がいくつかのメーカーから販売されており直径7mmまでシーリングすることが可能と言われている。サージトロンもシーリングデバイスを接続して使用できる。シーリング専用機ではないため、機器がインピーダンス検知によりシール完了を判断する機能はないので、術者の判断で通電を止める必要があるが、RFの特性上長めに通電したとしても組織を過度に変成することはなくシーリングに適した凝固が容易である。

使用電極：

バイポーラシーリングデバイス

全長：190mm	把持長：19mm
通電部の幅：4.0mm	先端形状：カーブ

出力モード、出力および通電時間：

BIPOLAR：15～25
通電時間：5～10秒

YouTube 動画閲覧
「ellman バイポーラ・クランプ」で検索